

国内初！古墳時代前期の 青銅器鑄造工房



7基の炉跡が確認された4号竪穴

4号竪穴の1号炉

加賀市八日市遺跡は、JR北陸本線加賀温泉駅から東へ1.8km、柴山瀧しばやまがたに流れ込む八日市川右岸に所在する古墳時代前期の集落跡です。

発掘調査では、竪穴建物たてあなたても、掘立柱建物ほったてばしらたても、川跡、板塀いたべい、祭祀施設さいしとみられる遺構などを確認しました。竪穴建物は川跡の両岸であわせて12棟が確認されました。そのうち2棟からは、青銅器の鑄造に関連すると考えられる複数の炉跡や遺物が出土し、鑄造工房であったことがうかがわれます。これら炉跡は古墳時代前期のものであり、この時期としては国内初の事例となります。

この他、川跡からは多くの木製品や土器が出土し、祭祀施設と思われる板組み遺構も確認され、当地で水辺の祭祀が行われていた可能性があります。また、広範囲を囲むように立てられた板塀跡もみつかり、工房と祭祀空間をもつ特別な集落であったことが推測されます。



H29 発掘調査

よう か いち い せ き か が し
八日市遺跡 [加賀市]



10号竪穴

炉跡が伴うもう1棟の竪穴建物です。
2基の炉跡は、住居内の中央付近に造られていました。



10号竪穴の1号炉

わずかに掘りくぼめた穴に粘土をはりつけた炉跡です。
炉跡の横には灰が詰まったピットを確認しました。



鑄造関連遺物

鑄の羽口や鑄型の一部とみられる鑄造関連遺物です。
湯口ばりは、鑄型の注ぎ口で固まった銅塊で、国内初出土です。



ぬのぼり
布掘建物

掘立柱建物の一種で、並行する二条の溝を掘り、溝の中に柱を建てる建物です。今回の調査では、建て替えも含めると4棟の布掘建物を確認しました。



板塀

等間隔に2本の柱に支えられる板塀(写真中央)です。
国内では検出例の少ない、貴重な調査事例となりました。



川跡内の板組み遺構

巨大な板を井桁状に組んだ遺構です。
「水辺の祭祀」に関わる施設と考えられます。

H29 発掘調査

寺境タブ遺跡、酒井バンドウマエ遺跡 [羽咋市]

寺境タブ遺跡と酒井バンドウマエ遺跡は羽咋市本江町から酒井町にある遺跡で、碁石ヶ峰の西側の扇状地に位置します。両遺跡は隣り合った、奈良・平安時代～中世の遺跡です。

寺境タブ遺跡では、調査区中央を流れる幅約 15m の川の北側で、平安時代の土坑や中世の掘立柱建物などを確認しました。平安時代では、土師器碗を 3 枚重ねて埋納した小穴と、土器がまとまって出土した土坑がみつけられました。この場所で祀りごとが行われた後に、土坑内に廃棄されたものと思われる。また、川の南側では、調査区南端で黒褐色土に砂礫が入った足跡がみつき、南端は中世以降、水田であったようです。

酒井バンドウマエ遺跡では、奈良・平安時代の掘立柱建物や溝、中世の掘立柱建物や木棺墓、水田などを確認しました。木棺墓は 2 基並んでみつけられました。屋敷墓とみられ、周辺には屋敷地があったと思われます。残っていた木棺の側板などから、木棺の長辺と短辺の長さはそれぞれ約 135 cm と 65 cm、約 155 cm と 50 cm です。調査区の北側では洪水で覆われた水田を 9 枚確認し、それらの中には洪水後、砂礫を取り除いて耕作を再開した水田や耕作をそのまま放棄した水田がみられました。また、水田の一角からは、64 枚の銅銭がみつき、その多くは宋銭で、中央の孔に紐を通したものも確認できました。

調査区北側は、奈良・平安時代の掘立柱建物の柱穴などに、洪水による砂礫が入り、上層で検出された中世の水田も洪水砂で覆われるなど、水による災害を受けやすい場所であったことがわかります。



土器が廃棄された土坑（右下は一部拡大）



木棺が納められた墓



銅銭出土地点

中世の水田（北東から）



水田からみつけた銅銭

H29 古代体験

古代体験学習講座 『藍の生葉染め』

第3回学習講座として、8月13日(日)に行いました。とても人気があり、23組28名が参加しました。

まず、染めの準備となる布を絞る作業を行いました。布を折りたたんで輪ゴムで固定し、布を強く縛るなど、仕上がりを想像しながらの作業です。次に農園に植えてある藍を一人約10本程度摘み取り、そこから100グラムの葉を切り刻んで水の中で揉み出し藍の染液のできあがり。そこに布をつけて自分だけのハンカチの完成です。

午後は、生の葉を、布の上にきれいに配置してラップし、上からハンマーで叩く、叩き染めです。一斉に叩くので、工房内に響く「ガンガン」という大音量。工房に来られた方は、さぞびっくりされたことでしょう。



風にたなびく藍のハンカチ

H29 古代体験

古代体験学習講座 『縄文狩人体験』

第5回学習講座として、12月3日(日)に「縄文狩人体験」を行い、14組16名が参加しました。午前中は矢づくりです。まず黒曜石を鹿の角で割って矢じりをつくりました。次に雁の羽根で矢羽根をつくりました。矢じりも矢羽根も糸でくくり矢竹に接着するのですが、丸い竹に位置や角度を考えながら、集中してていねいに仕上げなければなりません。できあがった矢は本館中庭で試射しました。姿勢を正し、獲物をねらった参加者は真剣そのものでした。

午後は、鹿の角を加工したアクセサリーづくりです。鹿の角を割れないように削り、表面に古代のデザインを刻み完成です。ふだんは体験できない黒曜石を使った矢と鹿の角のアクセサリーを手に、満足のいく一日となりました。



矢羽根の接着に集中



つくった矢で試し射ち

H29 古代体験

古代体験学習講座『古代の須恵器づくり』



杯の底を広げて成形



風船技法で長頸瓶の胴部を成形



長細い頸をつけて完成



復元古窯で焼成

第4回学習講座として、10月22日（日）に「古代の須恵器づくり」を行い、23名が参加して合計78点の須恵器をつくりました。はじめに県内の出土品をみながら須恵器について学びました。1200℃で高温焼成した須恵器は割れにくく平安時代までつくられていました。須恵器づくりでは、まず課題の杯をつくります。粘土を丸く平らにした底に太さ1cmほどの粘土紐をしっかりとくっつけ縁を形づくりします。底に積んだ粘土を押ししたり引いたりする土殺しをしたり、指で底の縁を広げたりして成形しますが、けっこう難しく、最初はうまくいきませんでした。

次の課題は長頸瓶です。胴部は粘土紐を5～6段積みあげていくのですが、粘土紐の太さにばらつきがあるとうまくいきません。輪積みで成形した筒状のものを粘土紐でふさぎ、へらなどを使って上から少しずつ力を加えて成形していきます。この風船技法で成形した下側に孔を開け、細く長い頸を積みあげていきました。最後に口縁部を少し広げ、頸の部分に二本線を引いて完成です。こうした課題作のほかに、双耳瓶や平瓶といった難しい器種にチャレンジする体験者もいて、充実した一日となりました。

つくった須恵器は、十分に乾燥させ、当センターの復元古窯で4日間焼成した後、窯を閉じて空気を遮断して還元状態にしました。焼きあがった須恵器は、固く焼きしまった青白い地肌になり、自然釉のかかった作品もみられました。



作品の展示

講座 考古学最前線 『加賀藩江戸屋敷の暮らしと文化』
—東京大学本郷キャンパスを掘る—

平成 29 年 12 月 9 日（土）、石川県立美術館ホールを会場に講演会が開催されました。はじめに当センターの和田龍介が、金沢城下町遺跡（東兼六町 5 番地区）の発掘調査を通してわかった、江戸時代前期から続く加賀藩士の墓地について報告しました。230 基の墓の半数以上は土葬で、甕棺と木棺の 2 種類がみられ、甕棺は全て越前焼の大甕が使用されていることが示されました。副葬品には当時の生活をしのぶ品々もあり、「江戸時代の武家の暮らしや墓制がわかり勉強になった」などの感想が寄せられました。また、調査地が禅宗寺院の旧墓地であることから城下町寺院の話もあり、アンケートには臨済宗寺院について具体的な質問が書かれるなど、関心の高さがうかがわれました。

その後、東京大学埋蔵文化財調査室准教授の堀内秀樹さんを講師に迎え、東京大学構内の加賀藩本郷

邸の発掘調査成果をもとに、武家の暮らしや江戸の様子などについて

講演していただきました。武家の儀礼での本膳料理や座敷飾りのありかた、茶の湯など、出土品と文献資料とからわかる当時の具体的な様子に、参加者の皆さんからは「出土した生活の品々から歴史を知るのはおもしろい」、「残されたものから当時の様子を追求していく努力を感じた」などの感想が聞かれ、考古学のおもしろさを感じてもらえたようです。講演では実際の出土品が美しい写真でたくさん紹介され、

東京大学の代表的な建

造物である加賀藩ゆかりの赤門などをはじめ、敷地内の空間利用の様子なども絵図と共に示されました。

「加賀藩江戸屋敷」という言葉に惹かれて参加したという方も多く、加賀藩や江戸時代の暮らし、九谷焼などへの興味の強さが講師への質問にも表れており、例年より多くの方々にご参加いただきました。今後も最新の研究成果について、みなさまにお届けしたいと思います。



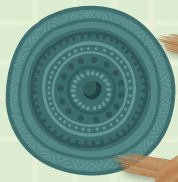
調査部の和田龍介



講師の堀内秀樹さん



会場は後ろに立ち見の方も・・・



まいぶん日誌

平成29年 平成30年

11月 ~ 2月



11月



発掘現場の説明会だよ
何がでてきたのかな?

寒さくらが咲いた



blooming

My硯をつくろう!



薪が届いた



WOW!



須恵器を焼こう

窯出し中
上手く焼けたかな?



煙突側もしっかり塞いで



土でも塞ぐぞ



酸素が入らないように
窯口を閉じるよ

考古学講座
弥生時代を知ろう



COLD

体験ひろば
雪で埋もれてたよ



2月

馬形はにわは
難しい!



初雪だ!
うっすら積もったね



合金を磨いて
剣をつくろう



古代の独楽も
楽しいな♪



12月



本館入り口に
門松が立ったよ



古墳を雪から
守るよ



仕事始めは
除雪から……



1月



収蔵品ギャラリー

収蔵品 No.27 「与野評」刻書平瓶

小松市 那谷金比羅山窯跡群

当センターが保管している出土品のなかから、えりすぐりの収蔵品をご紹介します。



平瓶（ひらか・へいへい）と呼ばれる器に、「与野評…」ではじまる6行の文字を先の尖ったへら状の工具で刻んだものです。小松市の^{よののこおり}那谷金比羅山窯跡群から出土したもので、古墳時代終末期（7世紀第3四半期頃）に焼かれたものと考えられています。

残念ながら文の大半が失われているため、何のために記したかは今となってはわかりません。冒頭に刻まれた「与野」（ヨノ・ヨヌ）は「江沼」（エヌ・エヌマ）の、「評」は「郡」の古い書きあらわし方で、今風に書くと「江沼郡」となります。

今も残る地名「江沼」のルーツがおよそ1,300年前にまでさかのぼるあかしであり、また古代の地方行政制度の成り立ちを示す上で全国的にも重要な資料といえます。

【関連報告書】 石川県立埋蔵文化財センター1989『那谷金比羅山古墳 那谷金比羅山窯跡群』